

大災害から30年を迎えた鹿児島県の取組

1. はじめに

鹿児島県は、南北600kmにもおよぶ広大な県土に、多くの島々や美しい海岸線を有し、「桜島」や「霧島」、平成5年（1993年）に日本で初めて世界自然遺産に登録された「屋久島」、令和3年（2021年）に登録された「奄美大島、徳之島」など、豊かで多様な自然環境に恵まれており、2つの世界自然遺産を有する唯一の都道府県です。

鹿児島県では、これらのかけがえのない自然環境を将来の世代に確実に引き継ぎ、「誰もが安心して暮らし、活躍できる鹿児島」を目指して、県民の安心・安全を実現する強靱な県土づくりなどに重点的に取り組んでおります。

昨年は、鹿児島県に甚大な被害をもたらした平成5年の大水害をはじめとする鹿児島豪雨災害から30年という節目の年でした。以下に、鹿児島県の災害対応や取組などについて、紹介します。

2. 平成5年の8・6水害

平成5年に鹿児島県地方においては、鹿児島県地方気象台で観測史上第一位の年間雨量4,022mmの長期異常気象に見舞われ、県内各地で大きな災害を受けました。この年間雨量は、現在も観測史上最大の降水量となっています。

鹿児島市を流れる甲突川^{こうつきがわ}では、8月6日の夕刻、市街地での溢水・氾濫により、ライフラインの途絶と併せ、150年ほど前に築造された5つの石橋のうち、武之橋、新上橋^{しんかみはし}が流失するなど戦後最大の激甚な水害（以下「8・6水害」という。）が発生しました。

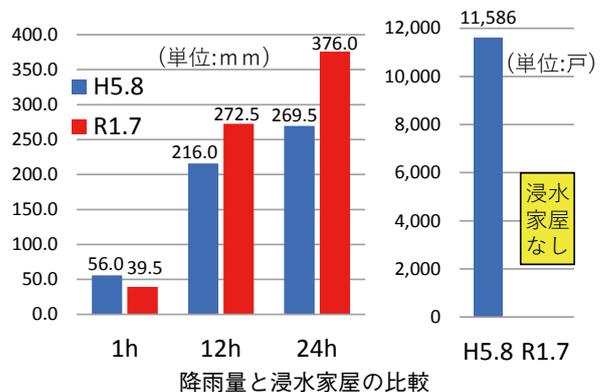
8・6水害では、甲突川の水位は、2時間で3m以上も上昇する急激なものでした。このため、流失した新上橋から上流は約6kmに渡り溢水し、国

道3号などの道路を流下して市街地へ流れ込み、床上・床下浸水など11,586戸の浸水被害が発生しました。

県では、再度の災害を防止し、早急に治水対策を進めるため、河川激甚災害対策特別緊急事業等を導入して河川改修を行っており、平成11年度までに整備を終えました。

3. 河川改修による整備効果

令和元年（2019年）6月末からの豪雨では、洪水への影響が顕著となる降雨継続時間の12時間及び24時間降雨量が、8・6水害時を上回りました。



この時、甲突川^{こうつきがわ}の他、鹿児島市内や県内各地の河川で水位が急激に上昇し、県内で7つの河川が氾濫危険水位を超過しました。また、鹿児島市では、市内全域の約60万人に避難指示が出されたものの、これまでの河川改修により、8・6水害時に11,586戸あった浸水家屋が全く浸水しない結果となり、完成から約20年を経て大きな整備効果を発現し、改めて、事前防災の重要性を認識しました。



鹿兒島県知事 塩田 康一



令和元年6月末からの豪雨時の甲突川(鹿兒島市)
氾濫危険水位を超えたが、これまでの整備効果により
浸水被害はなかった。

川幅一杯を流れる甲突川

4. 鹿兒島豪雨災害30年シンポジウム

当時の記憶を風化させることなく、近年、激甚化・頻発化している災害時の対応へ生かしていくため、昨年7月にシンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは、防災の学識専門家の他、当時、水害直後の災害対応を行った行政関係者も参加し、「あのとき何が起こったか」、「これまで何をしてきたか」、「これから、何をしていくのか」をパネルディスカッションし、多数の建設技術者が聴講し盛会に終わりました。



鹿兒島豪雨災害30年シンポジウム

5. 働き方改革に伴う災害査定のデジタル化

近年では、国において災害査定のデジタル化に取り組み始め、令和3年に実証実験を重ね、本年度、当県において、九州初のDX災害査定を実施しました。

ドローン、スマートフォンなどを使い取得した3D点群データや、360度カメラの撮影データから生成したVR（仮想現実）画像を活用し、専門的な技術や高価な機材がなくても災害査定を効率化できることを実証しており、今後の普及に期待しております。

6. おわりに

来月2月には第702回建設技術講習会が鹿兒島市で災害復旧をテーマに開催されます。現場研修においては、雄大な桜島・錦江湾を臨み、外国の船会社からもクルーズ船の寄港地として高い評価をいただいております。災害発生直後の一時避難所としても活用する「マリンポートかごしま」をご覧ください。

また、鹿兒島県には、冒頭紹介した豊かで多様な自然環境のほか、和牛日本一の鹿兒島黒牛をはじめとする多彩で豊富な食材、個性ある歴史・文化など、世界に誇れる魅力的な観光資源となる多くの「宝物」を有しており、「南の宝箱 鹿兒島」を存分に堪能いただきたく、多くの皆様のお越しをお待ちしております。

